

西田幾多郎『善の研究』-意識に始まる世界観-（前編）

京都大学文学部第5講義室

2015年2月6日（土）

0 はじめに

『善の研究』は西田の処女作であり、西田思想の全体を述べる唯一の本である。また、日本で最初の哲学書とされる。善の研究の構成は、

第1編 純粹経験

第2編 実在

第3編 善

第4編 宗教

である。今回はこのうち1編と2編の内容を扱う。

今回の主題は「真理を知るといふことを知る」といふことである。

1 考究の出発点

知識的確信

→ 疑うにももはや疑いようのない 直接の事実 から始まる。

…「我々の直覚的経験の事実、すなわち意識現象についての知識あるのみ」

疑い得るものがある場合は確信することができない

純粹経験（＝直覚的経験）…「思慮分別を加えない真に経験其儘の状態」

色を見て、音を聞く刹那、「自分が知覚しているその青が何であるか」はまだ考えていない。純粹経験が最初にあつて、それを反省し分析して、「私が」見たとか、「青」であつたとか判断する。

2 意識現象が唯一の実在である

純粹経験の外に実在があるといふのは、思惟の要求から出た仮定

まず初めに純粹経験があり、そこから純粹経験の外の世界を推察しているにすぎない。

この考えは独我論に陥るのではないか？

すなわち直覚不可能なものはなく、よつて他人の意識はないということになり、自分の意識しかないということになるのでは？

これは意識が必ず「誰かのもの」でないといけないう独断に陥っているから生じる問題である。

純粹経験では昨日の私と今日の私が同じ意識であるように、自他の区別もない

すなわち主客が未分化の状態が純粹経験である。例えば花を見るとき純粹経験の状態では、見ている私はなく、花と私が一体になっている。

3 実在（純粹経験）

分析の対象となったときにはもはや純粹経験ではない。ただしかつての純粹経験を分析しているその活動はそのときの純粹経験である。分析しているその現在の活動は 現在の意識 であり、それ自体はそのときの純粹経験である（分析しているその現在の一つの純粹経験）。… 例えば、音楽家の熟練した演奏は、その全体が一つの純粹経験である。^{*1}

純粹経験は、一つの者の発展していく活動… 真実在はいつも一つの者の発展という形式をとっている。この一者を統一的或る者と呼ぶ。あるいは、自らの性質により発展していく（純粹経験が唯一の実在）ので、文脈により、統一力と呼ぶこともある。

次に、その発展について考える

ex) 赤色を知覚

純粹経験を振り返ると、「赤色」が判断される。赤色は赤ならざる色に対して成立している。色が赤へと分化している。（赤と赤でない色が分化する。）

色彩感覚の鋭い人は、普通の人よりも色を細かく分析できる、すなわち、より精細に分化発展させることができているので、普通の色彩感覚の持ち主よりも真理に近づいているといえる。

すなわち、純粹経験の分化発展をより深めれば、真理に近づくことができる。

4 真理を得る

実在は凡て統一的或る者の分化発展であるので、より大きな統一、すなわちより多くの矛盾対立を調和統一したものがより有力な実在と考えられる。真理に近づくというのは、したがって、より統一を大きくするということである。

ex) ある現象を理解する

純粹経験は、主客未分、物我相忘れたる状態なのだから、対象を理解するというのは、その現象になるということで、理解を深めるといっては、その純粹経験の分化発展を深めることであり、それは、よりよく現象と一致することと言ってもいいようなこと。本文中では、これを、「生命の捕捉」や、「客観に一致する」と表している（「客観」というのは、普通に言うような主観的な情意を排したのではなく、最も多くの矛盾を調和統一したものとか、真理とかいった意味）。赤色を知覚する例と同じく、より精細に分化発展することで、より大きな統一を作ることになり、真理に近づくことができる。芸術家の直覚は、普通の人々の知覚よりはるかに豊富深遠であるが、そのような精神作用のことを、知的直観と呼ぶ。

生命というのは、この統一的或る者の活動であり、精神というのはこの統一作用である。精神について、本文を引用すると、「我々の精神とは実在の統一作用であるとして見ると、実在には凡て統一がある、即ち実在には凡て精神があるといわねばならぬ。しかるに我々は無生物と生物とを分ち、精神のある者となない物とを区別

^{*1} ただし、ここでいう「現在」は、普通に使っている、時間という形式を用いて捉え直した「現在」の意味ではなく、意識上の事実としての「現在」のこと。例えば、一つの問題を幾日にもわたって考え続けるような場合、そのときの注意の焦点というのは、同じ問題について考えていた前日の純粹経験と（時間上離れていても）地続きである。ただ、時間的にその間となる時には、その純粹経験を反省・分析することもあり、そのときは別の現在意識（純粹経験）になっている。それは、問題を解決せんとする純粹経験の統一を破った状態。そして、また問題の解決に向かって意志が働きだしたとき、再びそれは問題解決の純粹経験の続きとして、前日のものと続いているその全体を現在意識（注意の焦点）と捉えるのである。

するのは何に由るのであるか。厳密に言えば、凡ての實在には精神があるといってよい、前にいった様に自然においても統一的自己がある、これが即ち我々の精神と同一なる統一力である。例えばここに一本の樹という意識現象が現われたとすれば、普通にはこれを客観的實在として自然力に由りて成立する者と考えるのであるが、意識現象の一体系をなせる者と見れば、意識の統一作用によりて成立するのである。しかしいわゆる無心物においては、この統一的自己が未だ直接経験の事実として現実に現われていない。樹其者は自己の統一作用を自覚していない、その統一的自己は他の意識の中にあつて樹其者の中にはない、即ち単に外面より統一せられた者で、未だ内面的に統一せる者ではない。この故に未だ 独立自全の實在とはいわれぬ。動物ではこれに反し、内面的統一即ち自己なる者が現実に現われている、動物の種々なる現象（たとえばその形態 動作）は皆この内面的統一の発表と見ることができる。實在は凡て統一に由つて成立するが、精神においてその統一が明瞭なる事実として現われるのである。實在は精神において始めて完全なる實在となるのである、即ち独立自全の實在となるのである。とあります。^{*2}

^{*2} ここについては、発表者自身まだあまり理解できておらず申し訳ないです。